支部報告

関東支部報告：文化学園服飾博物館 解説見学会『紅白 夢の競演！』 －さまざまな国の“赤”と“白”－

Kanto Branch Report: Explanatory Tour of the BUNKA GAKUEN COSTUME MUSEUM "Red and White, the dream competition: Reds and Whites in various countries" exhibitions

荒木 紀久子　K's color design works
Kikuko Araki　K's color design works

文化学園服飾博物館において，「紅白 夢の競演！」－さまざまな国の“赤”と“白”－と銘打った展覧会が2022年12月9日より2023年2月14日まで開催された．これに合わせて，関東支部では解説見学会を開催した．

開催日：2023年1月28日（土）14：00～16：00
場　所：文化学園服飾博物館（新宿文化クイントビル）
参 加 者：22名

展覧会では，赤と白が世界のさまざまな地域で日常どのように使われ，どのような効果を持ったのかが6つのカテゴリーに分けて紹介された．

見学に先立ち，学芸員の金井光代氏から本展覧会の展示コンセプトに関する解説を頂いた．

①慶びと哀しみの赤と白：人生の節目の通過儀礼に赤と白はどのように使われるのか．慶びの色としての白の代表は婚礼衣装となるが，日本の白無垢とヨーロッパの白いウエディングドレスが紹介された．また，インドやトルクメニスタンでは婚礼の色として赤が使用される例も紹介された．悲しみの色といえば白というイメージだが，ガーナでは赤が使われる例が紹介された．

②祈りの白：いろいろな宗教の中で白が重要な意味を持つことが多く，日本における神道での白の重要性，イスラム世界のシリアではメッカへの大巡礼に男性が着用する白，キリスト教における白の意味が紹介された．

③ステイタス・シンボルとしての赤と白：赤と白が人の権威や富を象徴するものとして使われた．これは天然染料しか使われなかった時代に鮮やかな赤を染めることの困難さによるものである．コチニールで染められたトルコの鮮やかな赤いドレスやナイジェリアの一見白に見えるが細い赤い縞が入っている衣装が紹介された．白の例では貝によるスパンコールの装飾がある．内陸の地域では遠い海の産物が権威を示すものとして使われた．インドの男性の衣装として使われる，極細の木綿糸で模様を織り出した真っ白なモスリンは，真っ白に保てることがステイタスであるという例として紹介された（図1）．

図1　ステイタス・シンボルとしての赤と白

④コミュニティにおける赤と白：人は何らかのコミュニティに属して生活しているが，色は自分の立場や身分を表すものとして使われることがある．立場を示す色として，タイの山岳民族のカレン属の既婚者と未婚者を分ける赤と白の使われ方が紹介された．身分を示す色としてはブータンの肩掛けの色の紹介があった．赤と白は村長，白は一般市民，赤はお坊さん，というように一目でその立場がわかる（図2）．

図2　コミュニティにおける赤と白

⑤実用性のある赤と白：生活の中で赤と白が実用的に使われる例が挙げられている．暑い砂漠地域のアラブ世界では，男性の衣装として熱の吸収が少ない白が使われる．日本でも白地の浴衣は見た目にも涼しさが感じられるし，紅花で染められた赤は保温効果があるとして，肌襦袢などの下着に使われることがあったが，化学染料の時代になっても赤い下着を身に着ける風習が残っている．実際，年配向けの赤い下着は現在でも一部で売られている（図3）．

図3　実用性のある赤と白

⑥華やかな赤・繊細な白：赤と白の色が持つイメージをうまく取り入れたドレスとして，越路吹雪の赤いステージ衣装と2013年にクリスチャン・ディオールが発表した白いドレスが紹介された．

シークレット企画，特別出品として1992年のハリウッド映画「ドラキュラ」の石岡瑛子デザインの赤いマントと「ローマの休日」でオードリー・ヘップバーンが着用した白いドレスが展示されていた．

展覧会では服飾博物館が所蔵する中から，およそ40ヵ国の衣装や装身具が並び，金井氏の解説と展示により，衣服というとても身近な物を世界を通して見ることで，改めて世界の広さや多様性を感じることができた．